土車（つちぐるま）

第　149　号

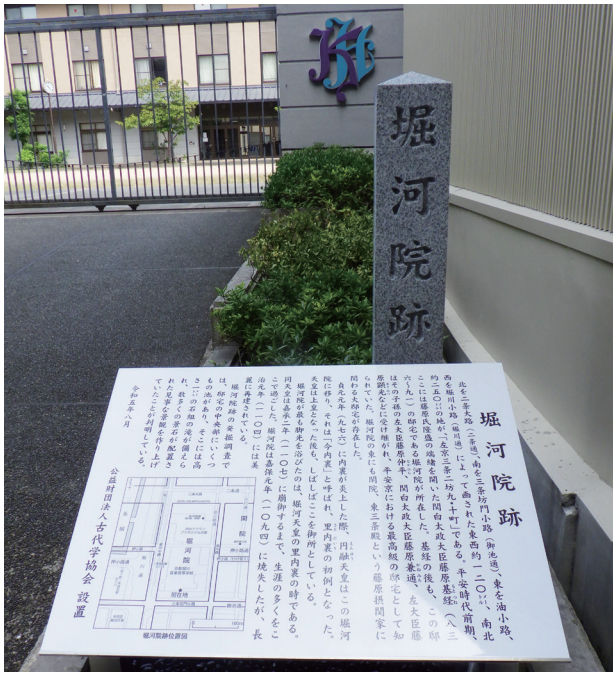
―令和５年12月20日発行―

公益財団法人　古代学協会だより

古代学協会設置　顕彰碑
堀河院跡

公益財団法人古代学協会は平安京をはじめとする史跡の顕彰事業に力を注いできた。今回は平安京の中でも最高の名邸として知られる堀河院の跡に顕彰碑・説明板を設置した。

堀河院（堀川院、堀河殿）は左京三条二坊九・十町に位置している。つまり、北を二条大路（現・二条通）、南を三条坊門小路（現・御池通）、東を油小路（現・油小路通）、西を堀川小路（現・堀川通）によって画された東西約一二〇m、南北約二五〇mの範囲を占めていたことになる。この邸宅は平安時代前期に関白太政大臣藤原基経が営んだものであり、その後も基経の子孫の左大臣藤原仲平、関白太政大臣藤原兼通、左大臣藤原顕光などに受け継がれていった。特に堀河院を著名にしていたのは美麗な庭園であり、それは「山石水木、誠に是を称翫す」（『左経記』長元五年三月二十五日条）と称賛されていたのである。



堀河院が最も脚光を浴びたのは、堀河天皇の里内裏の時代である。同天皇はこの邸宅で成長し、嘉承二年（一一〇七）に崩御するまで、生涯の多くをここで過ごした。同天皇の「堀河院」という追号も、同天皇がこの邸宅を最も愛していたことに由来している。なお、堀河院は嘉保元年（一〇九四）に焼失し、長治元年（一一〇四）に再建されている。

今回、京都市立堀川音楽高等学校の理解とご協力のもと、同校の正門前で御池通に面しているという絶好の場所にこの顕彰碑を設置することができた。この顕彰碑を通じて、同校の生徒さんや関係者の皆さん、さらにはここを通る多くの方々が平安京に関心を持っていただけるなら、これ以上の喜びはない。

山田　邦和
（当協会理事・同志社女子大学教授）

永延二年六月十三日条）。

貞元元年（九七六）に平安宮内裏が炎上した際、円融天皇はこの堀河院を臨時の御所とした。これが「里内裏」の始まりである。

藤ノ木古墳調査の想い出

奈良芸術短期大学特任教授　前園　実知雄

昭和六十年（一九八五）の夏、私は聖徳太子ゆかりの寺、大和郡山市額田部にある古刹の額安寺の一角で発掘調査を行っていた。そんなある日、旧知の新聞記者がやって来て「藤ノ木古墳の石室に家形石棺あり、それも未盗掘らしい」という情報を伝えてくれた。彼は学生時代、私たちと奈良県下の遺跡分布調査を行った仲間で、考古学には詳しいので誤報ではないと思ったが、すぐには納得できなかった。何故かというと、それまでに幾度かこの古墳の周囲を歩き、須恵質ではあるものの円筒埴輪の破片を確認し、古墳時代後期の古墳にしては規模が大きく、その大きさに比較して墳丘が低いなどから、少し時期の遡る中期古墳で、粘土槨などの埋葬施設が眠っているのではと思いその可能性を文章にしたこともあったからだった。

その後、半信半疑で古墳に向かい、横穴式石室の入り口から、朱に染まった石棺を目の当たりにしたときの驚きは例えようのないものだった。現場には緊張感が漂い、黙々と作業が進められている光景は、その時から十三年前の昭和四七年（一九七二）年の三月、まだ報道前の緊張した現場で高松塚古墳の壁画の前に立った時と似たものだった。

石室の玄室の片隅には、葬送儀礼に用いたと見られる須恵器群がまとめられ、特に興味を引いたのが、石棺の正面に須恵器の器台が一つ置かれていることだった。

調査の過程で明らかになったことは、古墳時代の須恵器の中に、江戸時代の土師器が混じっていたこと、器台の端には燈明の芯の燃えた痕跡が残っていたことだった。石室内にたまった土砂を取り除くと石棺の前面には器台以外は何もなかった。あの、世の中を驚かせた金銅製馬具を始めおびただしい遺物は、すべて石棺の後ろの石室奥壁との間の狭い空間から出土したのだ。

これらのことから石室内には近世まで人の出入りがあったことが明らかになった。そんななか、法隆寺塔頭の『宗源寺過去帳』の中に次のような記載があることがわかった。

「古墳の前には宝積寺という寺があり、この寺を三十一年にわたり守っていた法誉実操智真法尼という尼僧が、安政元年（一八五四）に寺が火災に遭った時に焼死した」ことが記されていた。ほかにも史料があり「みささぎの尼」と呼ばれていたようだ。その後、寺も再建されることはなく、石室が見つかったときの姿は、彼女の亡くなった安政元年の様子をそのまま残していたのだ。「みささぎの尼」が被葬者の名前を知っていたかは知る由もないが、丁重に供養していたことは明らかだった。

第一次調査は石室内に残された多くの副葬品や土器類の取り上げや、石室の実測作業が行われた。その過程で類例のない絢爛豪華な金銅製鞍などが明らかになり、大きなニュースとなった。埋葬当初のままの姿の石棺を開くにあたっては、様々な議論やテストを行った結果、三年後の昭和六三年（一九八八）五月から七月にかけて第二次調査を行った。この調査から私も現地調査を担当することになった。この調査の目的は二つあり、その一つは幕末に天誅組の乱に連座して処刑された伴林光平（ともばやしみつひら）の書いた『巡陵記事』の中に、藤ノ木古墳について「この陵魚子（なんこ）の如く形にて女塚のところに庵ありしを近年庵焼けて後そこを田になりて今みるところ円塚なり」と記されていることが気がかりだったことだ。つまり前方後円墳の可能性があるのでは、ということだった。周囲に調査区を設けた結果、直径約五十メートルの円墳であることがわかった。

もう一つは開棺の前に、ファイバースコープを用いて内部を観察することだった。以前に蓋が開けられたこともあるのでは、という懸念もあり、前夜暗闇の中で四周からライトをあて、棺と蓋の隙間を詳しく観察することにした。周囲では大きな話題になっていたこともあり、一抹の不安はあったが、この作業でそれは解消した。またその途中で、石棺表面に塗られた朱の刷毛目痕跡が、蓋と身の両方にまたがっているところが見つかったのだ。これは朱を塗布した以降に石棺は開いていないという絶対的な証拠だった。

翌六月二日から緊張の中で調査が始まった。石棺を傷つけることを最小限に考えたことと、最も効果的な部分とが一致し、石棺の東端から

六三センチのところに直径八ミリの穴をあけ、そこに直径七・九ミリの金属管にレンズを組み込んだボアスコープ（硬性鏡）と直径五・九ミリのファイバースコープを挿入し、観察を始めた。技術者から最初にカメラを渡された私の目に入った映像は、真っ赤な石棺の内壁と水面から一部顔を出した、大量の泥をかぶった遺物だった。

藤ノ木古墳出土鞍金具

冠や大刀の一部が確認できたので、やはり棺内は守られていたことは明らかだった。私はこの調査までは、今まで守られてきた石棺の蓋を私たちの手で開けることは少し躊躇する気持ちがあった。しかし、棺内の水の分析から多量の銅イオンが検出されたことから、このまま見過ごすことはできない。細心の注意を払って開棺調査にのぞもうと思うようになった。

第三次の開棺調査は九月三十日から始まった。それまでに、横穴式石室の一部を復元し、実大の家形石棺の模型を造り、開棺実験を繰り返した。実際の石室内には鉄骨を組み、そこにチェーンと滑車を取り付けたが、石室と石棺の間にはわずか二十センチほどの隙間しかない。石棺の蓋を開ける作業は長時間に及び、無事に終わった時に時計の針は深夜近くを指していた。

内部は蓋も身も真っ赤な水銀朱で彩られ、泥で覆われていた棺の底からはおびただしい遺物の一部が顔をのぞかせていた。最も驚いたのは泥の上部の水は十センチに及んでいたが、その水面には多くの乾燥した繊維製品の小片が浮かんでいたことだった。これは棺内が乾燥した後に、石棺の蓋と身の間から天井から泥水が浸入したためだった。繊維製品のほとんどは円形のスパンコールのような金銅製品の飾り金具を付けた、被葬者の上を覆っていた布だった。

調査を進めて行くうちに棺内には二人の人物が眠っていることが明らかになった。北側被葬者の右半身の骨の状態は比較的良好だったが、左半身と、南側被葬者の骨の多くは残っていなかった。この要因は長年にわたって石棺の南側から侵入した水のせいだと言うことは明らかだった。

被葬者が二人と言うことは、おびただしい副葬品の帰属を考えながら作業を進めないといけないということだ。マスコミの報道では、時間がかかっていることから慎重すぎる調査などと言われたが、実態はそういうことだった。四枚の銅鏡、六振りの刀剣類、冠、履、無数のガラス玉装身具などで飾られた被葬者は誰か、最も大きな関心事だったが、六世紀後半の大型円墳、大型横穴式石室に葬られた二十代の若い男性は、歴史上に名を残す人物であった可能性は強いと見て良いだろう。私はその人物を念頭において、かつて『斑鳩に眠る二人の貴公子』という小著を書いたが、その結論は今も変わっていない。

これも源氏！あれも源氏！どうして源氏！?

宇治市源氏物語ミュージアム館長　家塚 智子

『源氏物語』五十四帖のうち、最後の十帖は、主な舞台が宇治になることから「宇治十帖」の名で親しまれている。宇治市では、一九八九年の「ふるさと創生事業」を契機に、「紫式部文学賞」「紫式部市民文化賞」の創設をはじめ、「源氏物語をテーマとしたまちづくり」を推進している。一九九八年十一月に、宇治市源氏物語ミュージアムが開館し、二十六年目に入ったところである。二〇〇八年の源氏物語千年紀の年は、開館一〇周年にあたり、一回目のリニューアルを実施し、開館二〇周年の二〇一八年には、「観光」と「生涯学習」の拠点として再整備を行い、アニメーション『GENJI FANTASY ネコが光源氏に恋をした』を制作した。そして、ポストコロナ社会に向けて、今後の取り組みについて試行錯誤していたところに、二〇二四年一月から放送の大河ドラマの主人公は紫式部と発表された。これを契機に、現在、宇治市では、『源氏物語』、紫式部ゆかりのまち宇治の歴史・文化・観光の魅力を発信する「紫式部ゆかりのまち宇治魅力発信プロジェクト」に取り組んでいる。本号がお手元に届くころは、放送開始直前で、専門書からガイドブックに至るまで、続々と新刊が出版され、各地で展覧会やイベントが開催されていることであろう。大河ドラマの波及たるや、文字通り想像を絶するものがあり、すでに大河の渦に呑み込まれている。

さて、私は、『源氏物語』が与えた影響や、享受の様相に関心がある。そういう意味では、大河ドラマの影響もテーマのひとつで、実はリアルタイムに立ち会えること自体、有り難く、興味津々である。

私自身、これも源氏！あれも源氏！どうして源氏!?と、時として戸惑いながら、多種多様な「源氏文化」に直面するなかで、「源氏」というキーワードで、「源氏」的なる世界について注目するようになった。ここでいう「源氏」とは、狭義では「光源氏」であり、広義では「賜姓源氏」である。『源氏物語』は、裾野に広がるだけではなく、日本文化の底流に奥深く流れる。

こうした点に注目するようになったきっかけは、いくつかあるが、強く意識したのは、能《忠度》を観たときである。これまで気にしなかった（聞き取れなかった?）詞章が耳に飛び込んできたのである。それは、

しばしと頼む須磨の浦、源氏の住み所、平家のためはよしなし

と、しらざりけるぞはかなき、

という文句である。シテ（主人公）の平忠度は足拍子を踏み、囃子も盛り上がる箇所で、見せ場、聞かせ所である。

世阿弥作の能《忠度》は、藤原俊成に仕えていた人物が出家し、西国行脚の道中に須磨を訪れる。そこに平忠度の霊が現れ、俊成に託した和歌は『千載和歌集』に採録されたが、朝敵であるため「読み人しらず」になってしまったことを嘆き、作者の名を明らかにして欲しいと訴えるという物語で、忠度の和歌への執心を描く。

《忠度》や同じく世阿弥作の《敦盛》は、『平家物語』の一の谷合戦を本説としつつも、随所に『源氏物語』須磨巻を引用し、源氏詞をちりばめていると指摘されている。このことは知識としては知っていたが、理解していなかった。「源氏の住み所」を聞きとれた瞬間は、衝撃的であった。ここでいう「源氏」とは、鵯越から一の谷を攻める源義経軍ではない。光源氏である。須磨に住んでいる「源氏」は光源氏にほかならない。

また、《忠度》における若木の桜は、平忠度の菩提を弔うために植えられたものであり、墓標として描かれる。忠度の辞世「行き暮れて木の下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし」が深みを増す。

もちろん、須磨の若木の桜と言えば、『源氏物語』須磨巻において、光源氏が自ら植えた桜の若木である。若木の桜は、光源氏が須磨で暮らして一年が過ぎたことを物語るという役割を果たす。《須磨源氏》でも、光源氏の若木の桜について、語られる。『須磨寺参詣曼荼羅』にも、光源氏が桜を眺めるという光景が描かれており、物語の一場面から、現実の世界においても、須磨の景物になった。世阿弥は、敢えて光源氏の若木の桜から忠度の墓標へと展開させた。こうしたことを理解し、受け入れ、さらに楽しんだ人たちがいたからこそ、今日に至るまで、名曲として演能されているといえよう。また、狂言《薩摩守》では、「薩摩守忠度」から「タダノリ」がキーワー

山城之国宇治之里茶園之風景

山城宇治川蛍狩之図（部分）

ドとなる。

次に、視点を変えてみよう。柳亭種彦による合巻『偐紫田舎源氏』は、文政十二年（一八二九）に出版がはじまり、三十八編まで刊行された。天保の改革によって絶版処分を受け、作者も間なく没したため未完である。ところが、門弟や自称「弟子」らによって、擬似的続編『其由縁鄙廼俤』『足利絹手染之紫』『薄紫宇治曙』なども出された。

『源氏物語』を下敷きに、物語の設定を室町時代の応仁・文明の乱に置き換えられている。足利義政を彷彿させる将軍足利義正の若君である足利光氏が好色男を装いながら、山名宗全の陰謀を暴き、失われた宝物を探すという御家騒動の物語である。足利光氏のトレードマークは、海老茶筅髷という髷と、笹竜胆という清和源氏の家紋である。足利氏は清和源氏であり、源氏長者となった。公家と武家の「源氏」の正当な棟梁である。

主人公足利光氏を描いた錦絵自体、新たな源氏絵として人気を博した。足利光氏は全国各地の名所旧跡を訪れたり、年中行事を楽しんだりしている様子を主題にしている。源氏香図も散りばめられており、『源氏物語』を匂わす重要な記号である。こうした一連の作品を「ご当地源氏」と呼びたくなる。

この「ご当地源氏」は、宇治の茶摘や蛍狩にも登場する。江戸時代、茶摘と蛍狩といえば、初夏の宇治を代表する風物詩である。宇治市歴史資料館が所蔵する錦絵「山城宇治川蛍狩之図」「山城之国宇治之里茶園之風景」は、初夏の宇治に題材を求めた作品である。注目すべきは、両作品の右端に描かれる男性である。この人物こそ、足利光氏である。とはいえ、『偐紫田舎源氏』に、宇治は登場しないし、茶摘も蛍狩も出てこない。今日の人気のキャラクターが、あちらこちらの観光地を訪ねたり、地元の著名人や名産品に扮装したりするのと同様である。シルエットだけでも、ネコなのか、ネズミなのか、ネコ型ロボットなのか分かるように、海老茶筅髷を結っていれば光氏なのである。

能や錦絵だけではなく、『源氏物語』を本歌に重層的に、次々と新しいものが生み出され、無限に「源氏」的世界が展開されている。藤原俊成の「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」という一文は、和歌に限ったことではなく、日本文化にも当てはまるのではないかと、重く響く。

昨今の刀剣ブームのなか、『刀剣乱舞禹伝 矛盾源氏物語』という作品が上演され、ファンたちは『源氏物語』、能《源氏供養》に関心をもっているということを耳にした。大河ドラマも新たな層を取り込むにきっかけになると期待する。『源氏物語』は常に新しい媒体と融合して、読み続けられてきた。『源氏物語』の享受の歴史の最前線に立っていることを実感し楽しみたい。時には、飛行船、願わくば宇宙船に乗った気分で、冷静に俯瞰的に眺めたいと夢見ている。

木簡研究のおもしろさ（2）

龍谷大学特任教授　角谷 常子

次に簡牘の形態研究に移ろう。私は、内容もさることながら、当初から簡牘の形態、及び形態と内容の関係に強い興味を抱いてきた。その面白さの一端をご紹介したい。

私の簡牘研究は居延漢簡から始まったのだが、そもそも日本の簡牘研究自体、居延漢簡から始まっている。京都大学人文科学研究所で組織された研究班によるものである。当初は図版もない困難な研究環境であったが、それにもかかわらず今も色褪せない研究成果が生み出された（詳細は永田英正「漢簡研究事始の記」（『日本秦漢史学会会報』5号及び「續漢簡研究事始の記」（同氏『漢簡研究』所収を参照）。パソコン、データベース、画像処理など当たり前の時代にいる私はため息しか出ない。その後図版による研究が行われるようになり、次々にまとまった研究成果が発表され、漢簡研究の基盤が確立された。私はそうした学恩を受け、居延漢簡からスタートできたことは幸運だったと思っている。

学部生の頃、卒論のテーマをどうするかと聞かれ、秦か漢をやりたいと言うと、先生が即座に「秦はやめなさい」と言われたのを鮮明に覚えている。当時の私は秦と漢をさほど区別することなく、なんとなくひとまとまりという感覚でいたから、先生の反応は意外だった。恐る恐る小さな声で「なぜですか」と尋ねると、「史料がありません」と言われ、すぐに「体制や制度が整った、一応の完成形を理解することから始めるのが良い」と言葉を継がれた。素直な私はあっさりと、じゃあ漢にしよう！と思ったのである。完成形を理解するとは、確かな基準、物差しを持てということであろう。それがあればいろいろなものが測れる。簡牘研究も全く同じである。居延漢簡で得た物差しは、その後出現した秦簡や後漢簡の理解にも大いに役立っている。

この物差し論は、内容とか形態とかの区別なく全てに適用できようが、特に形態は即物的でわかりやすい。まずは西北漢簡（居延漢簡・敦煌漢簡・肩水金関漢簡・エチナ漢簡・縣泉置漢簡など、甘粛省を中心とする西北地域出土の簡牘を総称して西北漢簡と呼ぶことが多い。時期はおよそ前漢後半期から後漢初期）における形態からみてみよう。

西北漢簡の形態からの小さな発見といえば、過所である。過所とは通行証明書で、日本には、九世紀に中国（唐代）で発行された円珍の過所（国宝）が伝わるのでご存じの方も多いと思う。それにしてもなぜ通行証明書のことを「過所」というのだろう。過ぎる所、とは不思議な名前だなあとは思っていた。何となくもやもや感があったことは確かである。ただ、まあそんなものかと気にも留めなくなった。ところが、西北漢簡の中に「過所」と書かれた簡があったのである。その内容は「建武八年十月庚子、甲渠守候良遣臨木候長刑博便休十五日、門亭毋河留如律令」（E.P.F22:698）（大意：甲渠守候が臨木候長に十五日間の休暇を与える。門亭では足止めするな。**図1**）という通行証明書で、宛名のところに「過所」と書かれていたのである。つまり、この証明書をもった人物が通過する「チェックポイント宛」ということである。後に通行証明書が過所と呼ばれたのは、この宛名部分をもって文書の名称としたものであろう。

図1

さてこうした小さな発見も楽しいが、次には簡そのもの及び文書全体の姿形に目を転じてみたい。行政文書全体の姿は大きく冊書と単独簡に分けられる。冊書とは、複数の木や竹のフダ（後出の「札」と区別するため、カタカナ表記にした）をすだれのように紐でとじ合わせた（編綴という）形態をいう（**図2**）。綴じ合わせるフダには二種類あり、他機関に送る正式な文書には「両行」を、控えや草稿及び帳簿を構成する一つ一つのデータを書く場合には「札」を用いる。ちなみに「両行」と「札」は、当時の呼称である。それらには規格があり、両行はその名の通り二

図2　綴じ紐は失われているが、紐を通すための二筋の空白が残っている。

行書きで、サイズは縦一尺（約二三㎝）、幅約一寸（二・三㎝）。札は、一行書きで縦一尺、幅は〇・五寸程度の簡である。このように規格があるのは、現在役所や我々の職場で用いる紙がほぼA4で統一されている事情と同じだろう。全国の役所がばらばらの大きさの簡牘を使ってやり取りすると、事務処理上非効率であることは容易に想像できる。この一点だけからでも、西北漢簡の時代、即ち前漢武帝以降には文書行政システムが確立していたことが窺えよう。

次に単独簡であるが、これは一枚だけで完結するものをいう。行政文書には書式があり、例えば「五鳳二年八月辛巳朔乙酉、甲渠萬歳□長成敢言之、廼七月戊寅夜随塢陛傷要有寥即日視事、敢言之」（6・8）のように、年月日のあと「発信者＋敢言之」で始まり、文末は「敢言之」という書き留め文言で終わる、という具合である。それらが一枚の簡牘で完結しているのが単独簡である。冊書に使う両行や札には規格があったようだが、単独簡には規格はなさそうである（長さは一尺で同じ）。出土例をみると少なくとも両行以上の幅があり、中には四～五㎝に及ぶものもある。また両面を使うものも少なくない。今、「両行以上の幅」とか「四～五㎝」と言ったのは板状の単独簡のことである。単独簡の多くは板状なのだが（図3）、実は多面体のものもある。これは細い丸木を面取りして書写面を削り出したもので、宛先と印を押すための封泥（粘土）を入れる窪み（封泥匣）も備えたもので、先に紹介した過所の木簡はこのタイプである。

要するに文書全体の形態は、両行の冊書、札の冊書、板状単独簡、多面体単独簡の四種類ということになる。そして簡そのものの形状は、長さは基本的に一尺で、幅は札→両行→板状単独簡と、だんだん広くなる。私が木簡の勉強を始めた頃の概説書には、一行で書ききれなければ両行、両行でも書ききれなければ幅の広い簡を使う、というような説明があった。なるほどと思っていたが、写真をたくさん見るうちに、札、両行、板状単独簡それぞれの書きぶりや内容には違いがあるようで、単に分量の違いによって幅が広くなっているのではなさそうだと思った。そこで少し調べてみたところ、正式文書には両行、控えや草稿、データには札、年月日を省略し、かつ長官名義で発信されない簡略な文書には単独簡、という使い分けがあることがわかった。簡の形状と中身には対応関係があり、単独簡より冊書形式が、札より両行の方が格上に設定されていたようなのである。これは、五十年くらい前でいえば、はがきより封書が、鉛筆書きよりペン書きが格上とされていたのと似たような考え方だろう。

以上述べたのは、編綴や簡の幅の意味であるが、簡の長さに意味があることは文献にみえている。ただしそれは行政文書ではなく、書籍と皇帝の命令書である。まず書籍については、「易・詩・書・禮・樂・春秋の策は皆二尺四寸、孝経は謙じて之を半ばにし、論語の八寸策は三分して一に居し、又謙ず」（『儀礼』聘礼賈公彦疏引鄭玄『論語』序）と、六経→『孝経』→『論語』とその権威の高さが簡の長さで表現されている。また律については「二尺四寸之律」（『塩鉄論』詔聖）とか「三尺法」（『史記』酷吏傳）とあり、さらに詔書は「尺一」（『後漢書』儒林）などとみえる。西北漢簡における行政文書を見る限り、長さは基本的に一尺で、長さに意味をもたせようとはしていない。というよりも、そもそも書籍・法・詔書と行政文書とでは、形態の違いで表そうとしていることが異なっている。書籍や律などの長さの違いは、権威や重要性を示すものであるが、行政文書の冊書・単独簡、札・両行という違いは、授受する機関の上下関係を示すものではなく、正式文書か略式文書かという、あくまで文書自体の区別なのである。

では形態上、上下関係を表すものはないのかというと、それは言葉遣いである。例えば某機関が「～にいう」という場合、下級機関に対しては「告～」とか「謂～」と言う。一方上級機関に対しては「敢言之」といい、相手の職名や名は畏れ慎む意味で書かないのが基本である。また「送る」という場合も、下級機関に対しては単に「移（＝送るという意味）」のみだが、上級機関に対しては、「謹」をつけて「謹移」という。ただし皇帝発信の文書はすべて臣に向けてのもので、それには「下」という皇帝専用語を用いる。

（次号に続く）

図3　冒頭の年月日がなく、発信者も「官」だけの簡略な書式で、これ一枚で完結している。中央部の空白部分と切れ込みは、紐を掛け、封泥を置いて印を押すためのもの。

協会事業の報告

▽「堀河院跡」顕彰碑除幕式

九月四日（火）京都市立堀川音楽高等学校正門前設置の顕彰碑ならびに解説板の除幕式を開催しました。当協会として二十六カ所目の顕彰碑となります（京都市中京区御池通堀川東入る）。

御来賓として同校の中村陸子校長先生、福田聡事務長様、沓谷恭子教頭先生にご臨席賜りました。朧谷壽理事長より挨拶、山田邦和理事から顕彰碑についての説明の後、除幕が行われました。

朧谷理事長の「堀河天皇は雅楽の笙や笛の名手であってこの地で合奏も愉しんだことが史料からも知られている」という挨拶を受けて、中村校長先生から「千年の時を経て、この地で本校の生徒たちが音楽を愛し、奏でることは大変素晴らしいこと。これを機に音楽の学びを一層深めて行きたい」とのお言葉をいただきました。

以前、「堀河天皇里内裏跡」の碑が、近くのホテルに設置されていましたが、新ホテル建築に伴って撤去されてしまいました。このたび同校のご理解とご協力の下、ゆかりの地に設置できたことは喜びに堪えません。地域の皆様にも喜んでいただいていると伺っています。この地において本碑が長く遺り続けることを願っております。

左より　山田邦和理事、朧谷壽理事長、中村陸子校長先生、福田聡事務長様

▽公開講演会

九月二四日（日）京都府立京都学・歴彩館の共催をいただき公開講演会「古墳の終末と天智天皇陵」を開催しました。会場は、同館大ホール。朧谷壽理事長の開会挨拶の後、金田章裕館長からもお言葉を頂戴しました。講演会内容は、

中久保辰夫講師（京都橘大学准教授）
「山科の遺跡と御廟野古墳」
高橋照彦講師（大阪大学教授）
「飛鳥時代の古墳と天皇陵」

司会は、山田邦和協会理事（同志社女子大学教授）。

終末期古墳の様相にテーマを絞り、終末期古墳を考える上で重要な、天智天皇の真陵として異論の無い、巨大八角墳・御廟野古墳をテーマの中心に据えました。なぜ天智天皇陵が山科に築かれたのか、またそれに至る飛鳥の各時期の天皇陵の実態を考える内容となりました。

直前に両講師の体調不良という非常事態に陥りましたが、講演の録画上映、またその後の座談会は高橋講師は登壇、中久保講師にはZoomで遠隔参加をしていただき、論点をより深めていくことができたとおもいます。当協会としては初めての試みで戸惑いも大きかったですが、京都学歴彩館の関係者の皆様のご助力によって無事に終えることができたと思います。参加者二〇〇名。

座談風景　スクリーン左上より：中久保先生、山田理事、下：高橋先生

▽第十一回角田文衛古代学奨励賞授賞式ならびに授賞記念講演会

十月十五日（日）京都文化博物館別館ホールにおいて、第十一回受賞者・新尺（しんじゃく）雅弘氏の授賞式及び記念講演会を開催しました。受賞論文は、『古代文化』第七四巻四号、二〇二三年三月「近江・石山国分瓦窯からみた藤原京造瓦供給体制の特質－藤原京造営における律令負担の考古学予察－」。藤原宮の造瓦供給体制についての精緻な研究の成果が今後の日本古代の瓦の生産と供給、ひいては律令国家の体制の研究に大きな貢献をなすものとして、朧谷壽理事長より表彰状授与の後、「瓦で読み解く藤原京の造営と文明化」の講演に入りました。講演の後、伊藤雅文先生（〔公財〕石川県埋蔵文化財センター・古代文化編集参与）にもコメンテータとしてディスカッションに参加いただきました。出席者四〇名。

授賞式の様子
右：新尺雅弘氏

発行者　公益財団法人　古代学協会
京都市中京区三条通高倉西入ル
菱屋町四八
604-8131
電話〇七五－二五二－三〇〇〇
発行日　令和五年十二月二十日
印刷　明文舎印刷株式会社